

○フジバカマは中国産

フジバカマは本来中国が原産です。フジバカマは万葉集で憶良だけが詠んでいます。憶良は遣唐使として中国に渡っていますから、その土産に持ち帰り、広めるために詠んだとの説があります。花は藤色で、花弁が袴のようなのでこの名がつけました。

乾燥させて、鎧の中に入れて芳香を楽しんだようです。

○朝顔は桔梗

万葉集の朝顔は「夕陰にこそ咲きまさりけれ」とあり、キキョウであるとの見方が大勢です。桔梗は心棒(梗)を縛った(桔)堅い根茎から付いた名前前で、その根は気管支炎の薬に用いられています。

母からきいたものがたり

昔、ある秋の日子どもたちは摘んできた花を比べあっていました。どれも女郎花だったので、白菊を摘みにみんなで野原に行くことに。ところが、野原に現れた女郎花の精は、子どもたちが白菊をほしがることによって、他の花の精たちも引きつれて…



中央公民館

草木型染会の帆足講師の話

染色には葛の蔓の皮を剥いて煮て液を抽出し、その液で染めます。すると濃い緑色になります。

芒は、野焼した灰を媒染剤として使用します。繊維をその媒染剤に浸し、染み込ませて染料と結合させるための染色法として有効です。



撫子、萩、女郎花、桔梗などは、個人の家で庭先で見かけたり、一宮川の下流域の土手で、人があまり行かない場所で見かけることもあります。尾花、葛は、ちよつと気をつけて探せば、至るところに自生しています。葛の花は葉の陰に咲くので、葉を探してその下を覗くと意外に可憐な花が咲いています。

参考文献

万葉集2(角川ソフィア文庫)

角川書店

平成15年特別展野の花・今昔

監修 千葉県立中央図書館

茂原市の地名と伝説

萩原小学校記念誌

「明治の茂原に会いに行く」

8月25日(土)、いつもは絵画や書が並ぶ広い展示室に86名の市民が集まりました。

現在展示中の、明治150年記念事業テーマ展「明治の茂原に会いに行く」とのコラボで行われた、市史編さん委員2名による講演会に参加する人々です。

はじめに、各務敬委員により展示テーマと同タイトルの講演がありました。突然世の仕組みが大きく変わる明治期に、茂原地域は平民である多くの有識者が、地元発展のためにどう考えどう動いたのか、そして現代にどう受け継がれたか、板倉胤臣や千葉天夢を例に解説されました。

その元となる考え方を作り上げた嶺田楓江等の教育の力や、天然ガスの発掘、交通の発展を視点に、映像を豊富に使用した解説はとてもわかりやすく、併せて歴史編さん事業の意義も伝えられました。

もうひとつの講演、小川力也委員の「鶴澤總明と郷土」

は、市史編さんの最新調査報告です。自ら撫の子と称した鶴澤惣市が「總明」と改名し、大法学者、政治家として活躍していく過程を、支援者篠崎家との関係を交え報告。とりわけ、昭和21年の東京裁判において日本側弁護士団長を務めたことを、初めて知った人もあり、真剣に聞き入っていました。

最後に今後の茂原市史編さん事業への協力依頼もあり、参加者は改めて郷土茂原への理解と愛着を深めているようでした。

なお、このテーマ展は11月13日(土)まで開催しています。美術館・郷土資料館

☎(26)2131



ほのおか館より「図書コーナーへようこそ！」



本納公民館が本納支所との複合施設として移転・オープンしてから半年がたちました。本納の地名にゆかりのある「ほのおか館」の愛称名からどんな所だろうと足を運び、利用する方が多くなってきました。その中でも特に図書コーナーの利用者が以前の図書室と比べて増えています。図書コーナーは正面玄関を入った右側にあるので、立ち寄りやすく、日当りの良い場所には子どもたちが寝そべって本を読めるスペースもあります。また「ティーンズコーナー」の前では、中学生が友達と一緒に、展示してある本を読んでいる姿も見かけられるようになりました。

本納公民館 ☎(34)2349

◆「ハロータウン」は、「広報もばら」7月1日号、10月1日号、1月15日号の中に折り込んで発行しています。